

【事業実績】

「都市のカルチュラル・ナラティブ」プロジェクトの2019年度の活動は、都市文化を紹介するイベントの開催、国際的な情報発信のためのプラットフォーム構築、コンテンツ制作、人材育成プログラムの開発、プロジェクトの運営とモデル化という5事業からなる。本項では、それぞれの活動を「カルナラ！イベントシリーズ」「コミュニティをつなぐ・情報を伝える(連携と発信)」「文化を可視化する(コンテンツ制作)」「カルチュラル・コミュニケーターを育てる(人材育成)」「プロジェクトを育てる(プロジェクト運営とモデル構築)」と題して報告する。

報告の内容をまとめた報告書「都市のカルチュラル・ナラティブ '19」(日英バイリンガル)は、ウェブサイトで閲覧可能である。また、プロジェクトが制作したコンテンツは、SNS やブログといったオンラインメディアでも積極的に公開している。是非ご覧いただきたい。



SNS アカウント: (Instagram, facebook, twitter/@culnarra)



ブログ: (<https://medium.com/@culnarra.interns>)



報告書

「都市のカルチュラル・ナラティブ' 19」

プロジェクト 01: カルナラ！イベントシリーズ

「都市のカルチュラル・ナラティブ」は、学術成果の前景化を軸に今昔の文化資源を相互につなぎ、文化の物語(カルチュラル・ナラティブ)を結像することを目指している。このコンセプトを具体的に表現し社会に届けるための一つの装置が「カルナラ！イベントシリーズ」だ。プロジェクトメンバーの多様性を活かし、現代美術・寺院・建築・放送・生け花・食・和菓子といった幅広い主題をフィールドに、港区で展開する都市文化をその歴史的・文化的文脈とともに紹介する講演会、展覧会、ガイドツアー、ワークショップなどの開催を計画している。

本年度は、上映会、国際コンファレンスとガイドツアー、近代建築の講義と見学会、そして東京湾の今昔をテーマにした講演会と、盛りだくさんな実施内容となった。

ドキュメンタリー映像上映会「港画: 都市と文化のビデオノート」では、2018 年度に製作した地域文化資源ドキュメンタリー映像を上映し、監督を招いたポスト・トークで製作の意図や背景を共有した。

国際的なオーディエンスを対象とする 2 日間のコンファレンス「UMAC 東京セミナー: 文化commonsとしての大学ミュージアム」では、文化ハブとしての大学ミュージアムの役割と地域との関係について、基調講演、口頭発表などを通じて意見を交わした。2 日目には、地域の文化機関や東京の大学ミュージアムを訪れるガイドツアーを企画した。

「国際文化会館と3人の建築家たち」では、近代建築の重要な作品である国際文化会館を取り上げた。松隈洋氏(京都工芸繊維大学)による3人の建築家のコラボレーションについての講義のあと、松隈氏、国際文化会館スタッフがガイドするツアーで実際の建築と庭園を見学した。また、慶應義塾大学では、重要文化財を含む建築を一般公開する「慶應義塾三田キャン



パス 建築プロムナードー建築特別公開日」を開催。あわせて、今日の東京の建築について、都市計画の観点から考えるトークイベント「ArchitecTalk!」を英語で開催した。

「江戸前の海と文化」は、英語字幕を伴うバイリンガル講演会として開催。江戸前の海とその文化をめぐる、沿岸域政策や漁業の歴史、地域と共同したサイエンス・カフェ、江戸の写生画や浮世絵の魚介図など、領域横断的に話題が提供された。

来場者からの評価

「様々な方から、思いもつかない考えを知らされる心地良さを感じた」「非公開の文化財を見ることができた」「It was a great way to see some cultural highlights that would have been difficult to uncover as an individual visitor.」「セミナーは豊富な画像で理解しやすかった」「建築を残すためにできる活動はないか考えたい」などのコメントがあり、地域の文化と、文化をめぐる学術成果を多くの人に伝達しえたとともに、文化活動に対しより主体的に参加する契機となったという評価を得たと考えている。



プロジェクト 02：コミュニティを繋ぐ・情報を伝える（連携と発信）

地域の多様な文化資源を顕在化させ、さまざまなコミュニティにその情報を伝えていくために、本年度はとくに、ウェブサイトを通じた情報発信、地域の文化機関とのコミュニケーションの強化、類似する活動についてのリサーチに取り組んだ。

ウェブサイトを通じた情報発信に向けて

ウェブサイトを通じた情報発信については、ウェブサイト正式版の構築に向けて、区内在住外国人や留学生、地域の文化団体を対象に、昨年度制作したプロトタイプ版の評価セッションを実施し、フィードバックを得た。留学生を対象としたセッションについては、[報告書の p.24](#)で詳しく報告している。また、SNS アカウント(Instagram, Facebook, Twitter. アカウント名：@culnarra)の記事作成を留学生に依頼し、若年層の関心のあり方を探った。

本プロジェクトのウェブサイトは、テーマごとに情報をコンパクトにまとめられる情報カードに着想を得て設計されている。文化機関、人物、場所、史跡、作品といった対象の「種類」、読む、訪ねる、聞く、議論するといった「文化の学び方」、美術、建築、海といった「主題」など、ユーザー側からの興味に応じて、カードを絞り込んで情報を引き出すことができる。ユーザーインターフェイスも、サマリー、ビジュアルとして分かりやすい画像を用意し、また著作権情報をクリエイティブ・コモンズにのっって明記することにより、実際の情報活用を促す仕組みである。加えてプロジェクト自身がどのようなカードの組み合わせによって企画をプランニングしたのか、ケーススタディも提供している。



留学生による評価セッション



港区で発行されている地域文化マップなど

大使館へのヒアリング

港区の特性を活かして、大使館へのヒアリングも継続している。地域の文化と、大使館が文化事業などを通じてもたらす多様な文化とを接続してゆくことを念頭に、本年度はフランス大使館、マラウィ大使館、アルメニア大使館の担当

者にヒアリングやインタビューを行った。特にフランス大使館については、2021年に日本におけるフランス祭「La Saison」の開催を準備しており、現代アートを軸に据えた連携が期待される。

地域における活動の調査

また、地域内のつながりを拡大するため、地域の文化機関と積極的にコミュニケーションをとった。港区内の文化芸術団体をメンバーとする会議「港区文化芸術ネットワーク会議」（港区主催）の機会を活用し、区内に新たに開館する港区立科学館（虎ノ門）の担当者と開館後の連携の可能性について意見を交わしたほか、境内を地域に開放し、ユニークな「オープンテラス」活動を行う光明寺へのヒアリングを行っている。さらに、今後の連携の拡大のため、港区内で地域資源をめぐるアウトリーチ活動を実施する主体とその活動事例について予備調査を行った。調査の概要については、[報告書 p. 26 のレポート](#)を参照のこと。

本活動に類似した目的をもつ他地域のプロジェクトについても、プログラムに参加するなどの方法で情報を収集している。台東区と東京大学を中心とした「しのぼず文化情報活用プロジェクト」、法政大学江戸東京研究センターのプロジェクトなど、先行する事例に学ぶことは多い。今後、ヒアリングなどを通じて、プロジェクト間の連携の可能性についても検討していきたい。

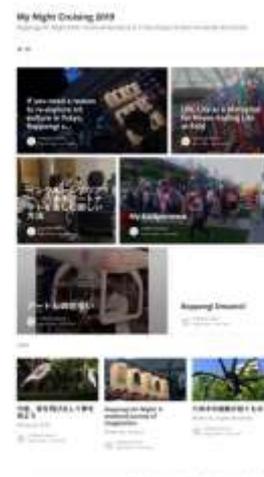
プロジェクト 03: 文化を可視化する（コンテンツ制作）

既存の学術成果を活用しながら地域の文化資源を多様なコミュニティに伝えるためには、どのようなコンテンツを準備すべきか。本年度のプロジェクトでは昨年度に引き続き、テキストの翻訳、ドキュメンタリー映像の製作、学生と共同したコンテンツ制作を実施した。

地域の文化資源に関するテキスト

テキスト翻訳における今年のテーマは「来場者の手に渡り、目に触れる情報」。増上寺の三門（重要文化財）や経蔵などのガイドツアーに使用するテキストや、展覧会「虎屋文庫の羊羹・YOKAN」の会場内解説の翻訳などを実施した。メンバーからは外国人来場者が増加したという手応えが報告されており、イベントに直接関わる翻訳効果の高さを感じた。

「江戸前の海と文化」講演抄録と地域の寺院文化に関するテキストのバイリンガル化にあたっては、人材育成の観点から、校正などの過程に慶應義塾大学の留学生が関わっている。また Project 04 で扱う「六本木アートナイトを語る—My Night Cruising」ワークショップに参加した受講生 14 名によるブログ記事も、オンラインで公開されている。人材育成プログラムと連携した制作は、コンテンツの継続性を担保し、また若年層の関心を喚起するためにも重要であり、本年度以降も続けて取り組みたい企画である。



受講生によるブログ

ドキュメンタリー映像で地域文化を紹介する：港画シリーズ

昨年度に引き続き、本年度も 3 本の地域文化資源を紹介する短編ドキュメンタリーの制作が行われた。藤川史人は東京海洋大学マリンサイエンスミュージアムにて、学芸員の業務や訪れる人々の様子など、博物館の日常を捉えた。阿部理沙の作品では、人間国宝（重要無形文化財「蒔絵」の保持者）である室瀬和美氏による作品制作の過程を追った。味の素食の文化センター食の文化ライブラリーでは、大川景子が、一般にはまだ知られていない専門図書館の役割を、利用者の関心を切り口に浮かび上がらせている。



味の素食の文化センターでの取材



ドキュメンタリー映像「港画」

<https://vimeo.com/showcase/minato-e>

プロジェクト 04：カルチュラル・コミュニケーターを育てる（人材育成）

地域の文化を多様なコミュニティに伝えるためには、言うまでもないことだがその活動を担うための人材が必要だ。現在は、美術館・博物館といったコンテンツホルダーとしての文化機関、出版社などの企業、アート NPO などのコミュニティがそれを担っている。これらの主体による発信を支えていくために、「都市のカルチュラル・ナラティブ」プロジェクトでは、プロジェクトメンバーに総合大学が含まれていることを活かした人材育成プログラムの開発を試みている。

六本木アートナイト 2018 との共同：My Night Cruising ワークショップ

2018 年度には、慶應義塾大学の学生・留学生を主な参加者としてプロトタイプ・プログラム「カルチュラル・コミュニケーター・ワークショップ（Cultural Communicator Workshop / CCWS）」を実施した。本年度は、昨年度の実践を下敷きとして、フィールドワークの対象を現代アートに拡大すること、参加者によるアート・フェスティバルのアーカイブ化という観点を導入することを目指して、六本木アートナイトとの共同企画としてプログラムを構築した。CCWS' 19「アートナイトを語る—My Night Cruising」については、[市川佳世子によるコラム\(p. 37\)](#)に詳しい。

「アートナイトを語る—My Night Cruising」からプロジェクトが得たものは大きい。学生と六本木アートナイト事務局など、文化に関わる人材がクラスをこえて交流したこと、大学と文化団体が主催するインターンシップという新たな枠組みで実験的な教育を展開したこと、学生が作成したコンテンツの社会発信について検討を深められたことなど、地域の文化団体と大学が共同するこのプロジェクトの強みが発揮されたプログラムとなった。



人材育成プログラム開発ワーキンググループ

CCWS の開催と平行して、実践から得た知見をプログラムの開発に繋げてゆくための検討を、ワーキンググループにて行った。WG では、CCWS の対象を社会人に拡大した場合に、どのようなプログラムを構築すべきかを中心に検討を行い、システム×デザイン思考のフレームワークに「地域の文化資源の魅力を広める」という CCWS の目的を重ねあわせ、プログラムを再構成することを試みた。WG での検討内容は、港区と共同した社会人向け講座「カルナラ・コレッジ」にてその一部を試験的に実施している。



参加者の感想

「町づくりやアートに関わる仕事を楽しそうだと思うようになった」「I was able to view arts in a different way by appreciating all the work put into making exhibitions or events happen.」「I expanded perspectives (thinking from multiple perspectives) as well as improve on my imagination skills.」等、プログラムに参加したことによってアート鑑賞の方法が変わった、視野が広がったなどプログラムを評価するフィードバックを得た。

プロジェクト 05：プロジェクトを育てる（プロジェクト運営とモデル構築）

「都市のカルチュラル・ナラティブ」プロジェクトでは、学術情報を軸に、組織の大小や運営母体を問わない柔軟で多様な文化機関の連携を実現する連携モデルを構築し、将来的には、地域や担い手となる組織の種類や規模が異なっても共有・実践可能なミニマム・セットを定義することを目指している。

本年度は、プロジェクトの実践や構築しようとしているモデルを国際的なコミュニティに紹介し、海外での取り組みを踏まえた意見交換を行うことに注力した。

プロジェクトの紹介

地域の国際的なコミュニティに対する働きかけとしては、港区国際交流協会主催のイベント「Let's Rediscover Japan (LRJ)」に協力し、プロジェクトの活動を紹介するとともに、文化資源の学習や活用における課題についてディスカッションを行った。

海外のコミュニティに対する発信としては、2019年9月に開催された国際博物館会議京都大会の大学博物館国際委員会(UMAC)において、人材育成プログラム「カルチュラル・コミュニケーター・ワークショップ」について口頭発表を行った。発表内容は、[報告書 p. 45](#)に再録している。各国の大学ミュージアムの実務者を中心とする参加者からは、公益財団法人、企業、寺院などさまざまな組織形態をもつ文化機関と、自治体、大学が連携する人材育成プログラムは、非常にユニークで先進的な取り組みであるとの意見が寄せられ、実現にあたっての課題や工夫など、実務面での質問も寄せられた。



UMAC での発表

自治体とのディスカッション

また本年度は、プロジェクトの今後の展開や実施形式をめぐり、自治体(港区)と積極的に意見交換を行った。プロジェクトのイベントを記録し、テキストや映像として公開することによって、イベントに参加しなかった人々にも広く文化資源の魅力を伝えることができる。これらの記録はまた、観光ボランティアなど、地域で文化資源のアウトリーチに取り組む人々の教材ともなりうる。自治体とのディスカッションでは、今後の活動を通して、地域文化資源を活用し広めてゆく担い手を育成し、文化の発信力を面的に向上させることへの期待が語られた。

プロジェクト運営

プロジェクト運営については、プロジェクトメンバー間での情報共有の仕組みにまだ工夫の余地がありそうだ。プロジェクトは、中核館における定例企画会議、プロジェクトメンバー全員が出席する全体会議と、メーリングリストでの連絡によって運営されている。プロジェクトの実施に関わる基本的な情報共有は達成されているが、ちょっとしたアイデアやノウハウの共有など、よりカジュアルなコミュニケーションを生み出すための仕掛けを用意できないか、今後検討してゆきたい。



プロジェクト全体会議